

氏名	新原 将義		
学位の種類	博士（心理学）		
学位記番号	博甲第 7803 号		
学位授与年月	平成 28年 3月 25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	校外専門家によるワークショップ型授業実践の学習 環境デザイン- 協働の支援及びプログラムデザインの観点から-		
主査	筑波大学教授	博士（教育学）	茂呂雄二
副査	筑波大学教授	教育学博士	原田悦子
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川進太郎
副査	東京藝術大学教授		佐野 靖

論文の内容の要旨

（目的）

近年「ワークショップ型」の音楽アウトリーチの授業が増加しているが、音楽アウトリーチに対する教育現場側ならびにアウトリーチする音楽家側の戸惑いも報告されている。このような現状の改善に取り組むため、本論は①様々な関係者による社会的相互作用によって進行する社会的実践として音楽アウトリーチを記述すること、②音楽アウトリーチにおける授業者の即興的な教授行為の特徴を把握すること、③これらの結果からワークショップ型授業における教師と専門家の連携の支援策を提案しワークショップ型授業の学習環境デザインの改善策について指針を得ることを目的とし、一連の質的研究を行なった。

（対象と方法）

研究1・2・3では音楽アウトリーチに関わった小学校音楽科教諭・保育者・音楽家の語りを対象に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用い音楽アウトリーチへの意味づけを分析した。研究4では保育園での2年間の長期アウトリーチの事例におけるミーティングを資料として、言説分析にもとづいて、意味付けの変化を縦断的に検討した。研究5～8では、音楽アウトリーチの実施場面における教授・学習過程を明らかにするために、小学校での音楽鑑賞アウトリーチ実施場面ならびに学校外の学生オーケストラの指導場面のビデオ・音声資料に相互行為分析を施した。

（結果）

研究1・2・3からは、教師が音楽アウトリーチの本物性と本物による児童の情動の変化を重視していること、保育者は子供の情動的体験を重視し情動体験の場として音楽アウトリーチを意味づけ、

音楽家は観客の声や子どもの声を直接聞ける場所といった新たな意味づけをしていることが明らかとなった。研究 4 では、アウトリーチ活動のミーティングの場が「権威的な言葉」賭して機能してしまう本物性言説に対する新たな語り方を模索され実践への意味づけのダイナミクスを喚起する場として機能することが示唆された。研究 5 では、音楽家と児童の対話は〈known な問いかけ〉、明確な正答を予期せずに行われる〈unknown な問いかけ〉等の 5 形態として整理された。研究 6 では、音楽家の教授行為は【課題の単純化】【集束的プロセスとしての対話の組織化】という 2 種のスキヤフォールディング、及び【拡散的プロセスとしての対話の組織化】【児童の声の読み替え】という 4 つの形態で展開されることが明らかになった。研究 7 では、プロの指揮者の指導が「楽譜記載の一義的情報」「楽譜記載の相対的情報」「楽譜非記載の改善指導」「楽譜非記載の暗黙知的指導」の 4 カテゴリーから成ることが明らかにされた。研究 8 では、オーケストラ指導場面における指揮者の指導過程の微視的な分析を行った。「楽譜記載の一義的情報」「楽譜記載の相対的情報」「楽譜非記載の改善指導」「楽譜非記載の暗黙知的指導」の指導が頻繁に行われていた 4 グループの小節を楽曲中からそれぞれ特定し、相互行為の展開過程を記述した。分析の結果、指揮者の指導は〈課題の難易度の調整〉〈なされたこととよい解決法との違いの明確化〉という 2 種のスキヤフォールディング的な働きかけ、及び〈リソースの再配置〉〈暗黙知の顕在化〉という 2 種の非スキヤフォールディング的な働きかけとして整理された。

(考察)

以上の結果から、①教師- 専門家の協働支援の一方策としての「権威的な言葉」に対する新たな語り方を模索するような言語実践の設定、②音楽科と学習者の即興的な相互行為を誘発することの重要性という、2 つのアウトリーチ活動の指針を得た。

さらに、この 2 つの指針を「社会的完成活動」としての相互行為を重視する発達の学習についての議論を参照することで新たな音楽アウトリーチの学習環境デザインの提案を行った。インプロの方法論とそこでの "Yes、 and" のルールを応用することで、社会的完成活動としてのアウトリーチ授業の提案を試みた。従来の「ワークショップ型」の実践と対比させ、インプロ及び "Yes、 and" のルールを応用した実践の枠組みを「パフォーマンス型」実践と定式化して提案した。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、近年増加している専門家を招聘して行われる音楽科ワークショップ型の授業に着目して、その学習過程を改善し、教師や音楽家からのニーズに応えるようなプログラム開発を目指して行われた研究であり、質的实践研究として評価できる。自ら音楽家とパートナーシップをくんで、アウトリーチ活動を長期に展開する等、介入的な実践研究としても高く評価できる。提案された、パフォーマンス型のアウトリーチ活動は、今後実際に実践して教育上の意味や使い勝手を評価する必要があるものの、理論的にも実践の指針としても新奇性をもち、評価できるものである。

平成 28 年 1 月 26 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。